19　『東医宝鑑』湯液篇の本草分類に対する研究

吳　在　根，金　容　辰
韓国 大田大学校韓医科大学

許浚の『東医宝鑑』湯液篇3冊は，朝鮮前期に郷薬の自立に寄与した『郷薬集成方』の伝統に基づいて成立した，朝鮮後期の代表的な本草著作である．そして『東医宝鑑』の構成編目だけではなく，「湯液篇」自体だけでも高い完成度を見せている．

『東医宝鑑』湯液篇では，宋代の本草著作である『証類本草』や朝鮮の世宗時代に刊行された医書『郷薬集成方』と同じように，薬物の起源や形態などの自然的な属性や特徴に基づいて本草を分類する，自然属性分類方式を採択している．すなわち「水部・土部・穀部・人部・禽部・獣部・魚部・虫部・果部・菜部・草部・木部・玉部・石部・金部」のように，独創的な本草分類項目の配列を試みながら，『証類本草』や『郷薬集成方』との差別化を果たしているのである．

これを全体的に見ると，『東医宝鑑』湯液編の本草分類項目は，朝鮮時代の伝統医学が持っていた天地人三才論的な世界観や，陰陽五行思想に即した自然生成観や，陰陽五行思想を基準とした動植物の分類，また治療（不常食）よりは調摂（常食）を重視する本草観などを基準として構成されている，と考えられる．

『東医宝鑑』湯液篇の本草分類方式の特徴としては，三品分類を形式上では廃止していることがまず挙げられる．三品分類というのは，本草古典である『神農本草経』以来の概念で，『証類本草』や『郷薬集成方』などに続いてきた伝統的な分類方式の一つである．しかし『東医宝鑑』湯液篇ではそれが本草分類の基準に活用されておらず，形式上では廃止されていると考えられる．ただし『東医宝鑑』湯液篇の湯液序例の中では，「三品薬性」の条目が見られる．また本草薬の配列が，『証類本草』や『郷薬集成方』などのように三品分類に基づいた順番で記載されている．したがって内容的には，依然として三品分類に従っていると推定される．

さらに『東医宝鑑』湯液篇の本草分類の特徴として，「代表本草」と「部属本草」方式を拡大して適用していることが挙げられる．「代表本草」とは，大きくいくつかの下位項目を持っていて，その中で代表性を持っている本草を示す．「代表本草」の下位項目に属した本草を「部属本草」という．そして「代表本草」の下位項目には属さないで，単独に配列されている「独立本草」を活用した分類方式である．これは『証類本草』と『郷薬集成方』で活用された方式であるが，『東医宝鑑』湯液篇では，それを拡大適用して精緻な本草分類をしていると判断される．

このような『東医宝鑑』湯液篇に見られる本草分類の特徴からすると，『東医宝鑑』湯液篇は『証類本草』と『郷薬集成方』を模範として編纂されてはいる．しかしながら両本をそのまま踏襲しないで，独創的な意見で改変していることがわかる．また，本草の編制構成も独創的であることがわかる．それは当時の朝鮮で，朝鮮薬物すなわち郷薬に対する研究水準が高かったことを現わすだろう．特に『東医宝鑑』湯液篇でよく見られる本草分類方式は，高い独創性と精緻さを持っていた．それは「明医学と郷薬方の融合」というより，「明医学の土着化と郷薬を通じての自主的解釈」である，と評価すべき根拠を提供している．